様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　２１年　５月　３１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720028
研究課題名（和文）　バーク崇高美学の形成とアイルランド精神文化との連関をさぐるフィールドワーク的研究
研究課題名（英文）　A Speculative Fieldwork on the Edmund Burke's Aesthetics of the Sublime in Relation to the Cultural Climate in Ireland

研究代表者
桑島　秀樹（KUWAJIMA　HIDEKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：30379896

研究成果の概要：　本研究は、主要な美的カテゴリーたる「崇高」概念をめぐっておこなわれた。その成果として、(1) まず、その導出の具体的な諸契機を、近代崇高論者の祖たるアイルランド人エドマンド・バークが生きた 18 世紀アイルランド（およびイギリス）の文化風土に求めた。これによって「崇高」が本来はらんでいた実践的な批判精神にまで肉迫し得たと思う。（２）次に、こうしたバーク以来の歴史的な「崇高」概念のうちに見いだされた「感性」的な思考法を現代へと応用することで、我々が現在かかえる喫緊の課題（人間存在の病理）を鋭く抉りだす可能性があることも示し得たと思う。結果として、「崇高の美学」こそ、混迷する高度に発達した現代社会の危機を乗り越えるのに重要な指針を与えるだろうということも分かってきた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	300,000	3,700,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　哲学　・　美学・美術史
キーワード：　崇高、山岳風景、エドマンド・バーク、ジェイムズ・バリー、ネーグル一族、アイルランド：イギリス、18 世紀、感性

１．研究開始当初の背景

2001 年度（個人科研費・日本学術振興会特別研究員奨励費の支給）以来、継続的におこなってきた、「崇高美学」の祖エドマンド・バークにかんする、アイルランドおよびイギリスなどにおける生活環境のフィールドワーク調査。ならびに、こうした実地調査と並行して（ないしその基礎理論研究として）、大阪大学文学部の学部・大学院（博士前期・後期）・特別研究員時代以来（学位取得：学士 1993 年、修士 1996 年、博士 2004 年）、さらに広島大学総合科学部奉職以来（2004

年 4 月より)、おこなってきた総合的かつ臨床哲学的な近現代「崇高」理論の表象文化論的な解明。具体的には、2004 年 3 月の（単著)「初期バークにおける美学思想の全貌—18 世紀ロンドンに渡ったアイリッシュの詩魂—」（大阪大学大学院文学研究科・平成 15 年度博士学位論文)、2005 年 10 月の(単著)「〈崇高〉とは何か—生の臨界点に立つ美学—」(『臨床哲学研究』第 6 号、pp. 74-99)〔以上２つの論文は広島大学図書館リポジトリにも電子版あり〕にまとめられた研究の延長である。

２．研究の目的

(1) バークの「崇高」概念の導出過程を、近代最初の崇高論者たるアイルランド人エドマンド・バークが生きた 18 世紀のアイルランド（およびイギリス）の文化風土との関連から具体的に（フィールドワーク調査を通じて）探ることが第一の目的であった。(2) また、こうしたバーク以来の「崇高」概念に内在する要素を取り出し再規定することで、現代社会における様々な文化的諸事象（歴史記述・精神病理など）をめぐって、「崇高美学」を念頭においた「感性論＝美学」的な研究視座の有効性を、臨床的に確認することもまた重要なねらいであった。

３．研究の方法

主として以下３つの方法で研究に従事した。(1) アイルランドならびにイギリスへの現地フィールドワーク調査（特に現地の研究者・郷土史家との情報交換）および映像を含む現地資料収集。(2) 国内の美学芸術学、アイルランド文化史、18 世紀思想等の関連分野の研究者（大学等教育機関ばかりでなく、美術館・博物館所属の研究者）との情報交換および原物作品の検分。(3) 18 世紀を中心とするアイルランドおよびイギリス芸術・文化・宗教・歴史など関連稀少書籍の購入と検討。

４．研究成果

(1)　海外フィールドワーク調査

主として 2007 年 3 月、2008 年 3 月、2009 年 1 月の海外調査を踏まえ、①幼少年期を過ごした父母の故地アイルランドコーク州ブラックウォーター渓谷でのバーク関連遺構の詳細な位置確認（2001 年調査時の研究成果の確認と修正)、②中等学校教育を受けたアイルランドキルデア州バリトアのクエーカー寄宿学校の経営者兼校長Ａ・シャクルトンによるバークへの影響。ことに当時の英国ヨークシャー州スキップトン（シャクルトンの出身地）周辺におけるクエーカリズムの興隆と教育システムの拡充・伝播の様相の確認。③1750 年頃のバーク渡英以後のロンドンでの生活環境の変遷（居住地の確認）とロンドンに住むマイノリティ（「宗教難民」たるユグノーやクエーカーなどの職能）の生活環境の変化の比較（あるいは、ロンドン市域の拡大との呼応の確認)。④1760～70 年代のバーク政界登場後のパトロン状況（コーク州出身の同郷後輩画家ジェイムズ・バリーの援助）や北米や故国アイルランドとの植民地貿易の自由化をめぐるブリストル商人（陶磁器製造業者リチャード・チャンピオン）との深いかかわりの発見。以上の成果は、以下業績一覧に記した、2009 年 1 月以降随時執筆の研究エッセイ・シリーズ、「＜崇高＞の聖地—愛蘭土紀行」(1) (2) (3) (『誠信プレビュー』) および「バークの肖像」(その 1) (『広島芸術学会報』)、また「コーク生まれのカトリック画家 ジェイムズ・バリーの出帆」(『日本アイルランド協会会報』) と公開されている (なお、さらに別稿も公刊・公表予定)。

(2) バーク崇高美学の現代への応用

主として、2008 年 5 月に上梓した単著『崇高の美学』講談社（選書メチエ）が、バークを核とする崇高美学の歴史展開（＜自然と人間＞の関係から）と、現代の高度科学技術社会における現代的崇高論（＜技術と人間＞の関係から）とを架橋する総合的な研究成果だといえよう。また、本書の刊行と前後する、2008 年 3 月のアメリカン･サブライム論(『臨床哲学研究』広島大学）と、2009 年 5 月の歴史的崇高（あるいは原爆ヒロシマ）論（『芸術はどこから来てどこへ行くのか』晃洋書房）は、まさにバーク以来の「崇高」概念のはらむ感性的な批判力が、現代社会における歴史記述の問題（あるいは人間精神の病理）を鋭く抉るのに成功していることを示した成果だと思われる。わけても、世界最初の被爆地ヒロシマをめぐる表象化（あるいは歴史記述）の問題を、その表象不可能性に注目しつつ「歴史的崇高」概念を援用して考察したことは特質に値しよう。その際、遺物断片としての「被爆資料」（原爆ドームも含む）保存の意義、原爆ミュージアムとしての平和資料館や慰霊碑を中心とする平和記念公園という視覚システムが拠って立つ感性的な（＝美学的な）側面にまで論究できた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

（1）桑島 秀樹、（単著エッセイ：査読無）「＜崇高＞の聖地―愛蘭土紀行（3）キャッシェル」、『誠信プレビュー（seishin Preview）』第 106 号（広報誌）、誠信書房、pp.3-6、2009 年 7 月予定（4 月入稿済み）。

（2）桑島 秀樹、（単著エッセイ：査読無）「＜崇高＞の聖地―愛蘭土紀行（2）コーク州ブラックウォーター渓谷」、『誠信プレビュー（seishin Preview）』第 105 号（広報誌）、誠信書房、pp.3-6、2009 年 5 月。

（3）桑島 秀樹、（単著エッセイ：査読無）「コーク生まれのカトリック画家 ジェイムズ・バリーの出帆 ―1764 年、同郷の政治家バークに見初められて―」、『アイルランド協会会報』第 73 号（日本アイルランド協会編）、p. 7、2009 年 4 月。

（4）桑島 秀樹、（単著エッセイ：査読無）「バークの肖像（その 1）―ブリストル陶器と自由と妻ジェーン―」、『広島芸術学会報』第 102 号（広島芸術学会編）、p. 3、2009 年 4 月。

（5）桑島 秀樹、（単著エッセイ：査読無）「＜崇高＞の聖地―愛蘭土紀行（1）ゴールウェイ」、『誠信プレビュー（seishin Preview）』第 103 号（広報誌）、誠信書房、pp.3-6、2009 年 1 月。

（6）桑島 秀樹、（単著論文：査読無）「＜崇高＞の展開と＜山岳美学＞の形成― 一八世紀イギリスにおける理論化まで―」、『藝道思想の現代的意義について―日本的展開を焦点として―』（研究代表：青木孝夫（課題番号 15320023） 平成 15～18 年度科学研究費補助金・基盤研究＜B＞研究成果報告書）、pp. 23-43（巻なし）、2008 年 3 月。

（7）桑島 秀樹、（単著論文：査読無）「アメリカン・テクノロジーと現代の崇高―＜非人間的なもの＞に抗して―」、『世界肯定の論理と技法―臨床哲学と比較思想との統合的国際的研究』（研究代表：古東哲明（課題番号 16320006） 平成 16～19 年度科学研究補助金・基盤研究＜B＞＜１＞研究成果報告書）、pp. 58-77（巻なし）、2008 年 3 月。

（8）桑島 秀樹、（単著論文：査読有）「現代崇高事情―美学史からみた＜バーク崇高論＞読み直しの意義―」、『英詩評論』第 22 号（中国四国イギリス・ロマン派学会編）、pp. 10-21、2006 年 6 月。

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 3 件）

（1）桑島 秀樹、（共著）『芸術はどこから来てどこへ行くのか』晃洋書房（大森淳史、岡林洋、仲間裕子編）、2009 年 5 月。（単独執筆個所：「＜歴史的崇高＞あるいはヒロシマ―原爆資料を受肉される舞台『父と暮せば』―（pp. 439-453）」）。

（2）桑島 秀樹、（単著）『崇高の美学』講談社（選書メチエ 413）、2008 年 5 月（総ページ：254 p.）。

（3）桑島 秀樹、（共著）『イギリス哲学・思想事典』研究社（日本イギリス哲学会編）、2007 年 11 月。（単独執筆個所：人名「ジェラード、A. （p. 601）」「ホガース、H. （p. 656）」「レノルズ、J. （p. 677）」、事項「エンサイクロペディア（pp. 28-31）」「崇高（pp. 310-312）」「ピクチャレスク（pp. 426-427）」）。

〔その他〕

（1）単著『崇高の美学』講談社（〔図書（1）〕の業績）にかんする主な書評・報道等一覧

①『美術手帖（BT）』（月刊：通巻 917 号）2009 年 1 月号、美術出版社、pp. 56-57、（「読み、考えることで感性を磨く 10 冊の本」：評者 天内大樹・建築美学者）。

②『図書新聞』第 2888 号（週刊）、2008 年 10 月 4 日（土）付、第 4 面。

③高橋哲雄『都市は＜博物館＞―ヨーロッパ・九つの街の物語』岩波書店、p. 145、2008 年 9 月。

④『山と渓谷』2008 年 9 月号（月刊：通巻 881 号）、山と渓谷社、p. 204（評者 浜田優・詩人）。

⑤『上毛新聞』（朝刊）、2008 年 7 月 6 日（日）付、日曜書評（新刊ガイド）。

⑥『日本経済新聞』（朝刊）、2008 年 6 月 29 日（日）付、第 25 面（読書欄：評者 塚原史・早稲田大学教授）。

⑦『中国新聞』（朝刊）、2008 年 6 月 7 日（土）付、第 11 面（文化欄：ニュース報道記事）。

（2）博物館パネル展示

「崇高の美学――宮島風景美学」（単独展示パネル：２枚）：展示パネル１「宮島風景美学―崇高な山岳と優美な社殿、大鳥居からのピクチャレスクな眺め―」、展示パネル２（回転パネル）「ヒロシマ《崇高》天地反転図：広島二大世界遺産、あるいは、反転する二つの＜崇高＞―厳島神社と原爆ドーム―」、広島大学総合博物館・第二回企画展《世界遺産宮島の魅力―発進！！広大の宮島学―》、「宮島から世界へ――広島大学からの発信」部門、会期：2008 年 7 月 18―8 月 7 日（於広島大学・学士会館）、別日程にて他会場巡回。

（3）書評

Peter de Bolla, *Art Matters*（Harvard University Press, 2001）、『心の危機と臨床の知』第 8 号（甲南大学人間科学研究所編）、2007 年 2 月。

６．研究組織

(1)研究代表者
桑島　秀樹（KUWAJIMA　HIDEKI）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：30379896

(2)研究分担者

(3)連携研究者